アウグスティヌスの聖書解釈学における記号理論と言語理論
――*De magistro* から *De doctrina christiana* への展開――

須藤　英幸

一　問題と方法

アウグスティヌス（354～430 年）の初期著作群（386～390 年）と独特の実存的表現を含む中期の『告白』*Confessiones*（397～401 年）との間には、明らかな文学的アプローチの相違性が認められる。直観的に把握され得るこの文学表現的相違は、思想的に如何に説明され得るのか。彼を取り巻く状況的な視点から言えば、アウグスティヌスが 391 年にヒッポの司祭に叙階されて以来 、劇的に変化した Sitz im Leben において行われた一連の聖書研究の直後に、『告白』は忽然と現れる文学作品であるが、このような『告白』へ至る道は、如何なる神学的土台に支持され得るのか。この問いが、背後から本研究を動かす動機である。

司祭叙階直後のアウグスティヌスにとって急がれた仕事は、説教者として聖書を深く理解することであった 。やがて、その努力が聖書解釈の方法の発見へ繋がっていく。司祭として、アウグスティヌスはマニ教やドナティストとの論戦を繰り広げる一方で、聖書注解にも勢力を注ぐ。392 年頃から、『詩編の講解』や『逐語解釈による創世記、未完本』などの旧約聖書の研究に取り組み、他方で、394 年頃から、『使徒のローマ人への手紙諸論題の注解』、『ガラテヤ人への手紙の注解』、『ローマ人への手紙の未完注解』、『シンプリキアヌスへ』（396 年）と続くパウロ書簡の研究に集中的に取り組む 。その後、直ちに執筆された『キリスト教の教え』第 1～3 巻（396／397 年） において論じられるのが、聖書解釈の方法、すなわち、聖書解釈学である。『キリスト教の教え』と同様に、言葉を記号と捉える『教師論』*De magistro*（389／390 年）の後半部分で、「記号によっては何も学ばれない」ことが主張されるのに対し 、『キリスト教の教え』*De doctrina christiana* 第 1 巻の冒頭付近では、「事柄は記号を通して学ばれる」 と宣言される。これらの主張の矛盾は、如何に理解され得るのか。このような、記号や言葉によって知識の伝達が可能であるかの否かという言葉の媒介性問題が、本研究における直接的な問いである。

本研究の目的は、言語的媒介性における相違が『教師論』の「記号によっては何も学ばれない」と『キリスト教の教え』の「事柄は記号を通して学ばれる」との間に見出されるという立場に立ち、言葉の媒介性問題に対する解決方法を探ることを通して、アウグスティヌスの聖書解釈学における記号理論と言語理論、及び、『キリスト教の教え』の聖書解釈学に関する学問的な理解を一層前進させることにある。

本研究の方法は、アウグスティヌスの記号と言語に関する研究において徐々に明らかにされた二つの特徴に立脚する。すなわち、アウグスティヌスの言語的記号におい

て、記号理論的な側面と言語理論的な側面とが見出されること、及び、受信型記号（聞き手が受け取る記号）の特性と発信型記号（話し手が口述する記号）のそれが相違することである。

研究史的には、『教師論』と『キリスト教の教え』とにおける言語的記号に関して、C・マイヤーはアウグスティヌスの「記号理論」に変化は見られないと述べ、U・ドゥフロウは「言語理論」の発展的相違性を主張し、L・フェレッターは記号理論を凌駕する言語理論を『三位一体論』に見出し、それが『キリスト教の教え』にも萌芽的に含まれることを暗示する。他方で、ドゥフロウは言語理論が「受信すること」と「伝達すること」から理解される可能性を述べ、M・D・ジョーダンは受肉に基礎付けられた「表現的記号」に注目し、フェレッターは「話し手の口述」と「聞き手の学び」が異なる過程であることを主張する。さらに、C・カーワンは＜記号―事柄＞関係の視点からは記号群が「言葉群」words と捉えられ、＜記号―思考＞関係の視点からは記号群が「文章群」sentences と理解されることを示唆する。

以上の諸研究を基礎に、本研究では、単語単位が問題とされるアウグスティヌスの指示関係＜記号―事柄＞に関する言語的記号の分野を「記号理論」と規定し、更に、文章単位が問題とされる口述関係＜思考―記号＞に関する記号的言語の分野を「言語理論」と規定する。

二　各部の概略

この枠組みの下で、本論文第 I 部で「アウグスティヌスの記号理論」が、第 II 部で「アウグスティヌスの言語理論」がそれぞれ扱われる。第 I 部では、第一に（第 1 章）、『教師論』における認識理論を概括し、第二に（第 2 章）、『問答法』で展開されるアウグスティヌスの記号理論がストア学派の記号論と言語論との総合であることを論じ、第三に（第 3 章）、『キリスト教の教え』における記号理論の三項構造を探求することを通して、マイヤーが主張するように、アウグスティヌスの記号理論に一貫性が保持されることを明示したい。

加藤武は、388～396 年の間にアウグスティヌスが思想的な「一つの回転」を経験したであろうことを主張する。他方、J・P・バーンズは、『キリスト教の教え』における聖書解釈学が『シンプリキアヌスへ』の回心構造における「相応しい呼びかけ」に見受けられる思想的転換から影響を受けていることを主張する。本研究では、『教師論』から『キリスト教の教え』へ至る思想的展開がアウグスティヌスの言語理論に属するものであると捉え、その原因と思われる思想的転換が『シンプリキアヌスへ』の回心構造における「相応しい呼びかけ」概念の発見に見出され得るという立場に立つ。

この仮説的構造の下で、第 II 部では、『教師論』から『キリスト教の教え』へ至る言語理論的な展開が辿られ、『シンプリキアヌスへ』における思想的転換が如何に『キリスト教の教え』に影響しているのか、が探求される。第一に（第 4 章）、『教師論』

の主題が「記号によっては何も学ばれない」ことであることを確認し、それが『キリスト教の教え』から『三位一体論』へ連なるところの受肉に基づく言語理論と明確に相違することを明らかにし、第二に（第 5 章)、『シンプリキアヌスへ』の回心構造における恩恵概念の転換を突き止め、その『キリスト教の教え』序論との連続性を探究する。その結果、『教師論』と『キリスト教の教え』とにおける言語理論は互いに相違し、その原因が『シンプリキアヌスへ』におけるアウグスティヌス特有の恩恵概念の発見にあることを明示したい。

第 III 部では、『キリスト教の教え』の聖書解釈学そのものが扱われる。第一に（第 7 章)、『キリスト教の教え』では解釈のクライテリアに即さないものは比喩的に解釈すべきものと考えられているが、解釈のクライテリア、すなわち、「神と隣人を愛すること」及び「神と隣人を知ること」とキリスト教共同体との関係性を探究し、第二に（第 8 章)、「知恵」sapientia の最高段階へ進む七段階の生の展開において、「知識」scientia の第三段階に属すると思われてきた聖書解釈の役割、すなわち、聖書言語の媒介的役割が生の進展に如何に作用するのか、を探求する。その結果、『キリスト教の教え』の聖書解釈学における言語理論と彼の Sitz im Leben との関係性、及び、聖書言語における解釈行為が生の展開に作用する本質的な重要性を明示したい。

三　各部の結論

研究の結果、次の結論を得た。第 I 部の「アウグスティヌスの記号理論」では、第一に（第 1 章)、『教師論』における記号は単語単位に属し、その記号理論は＜記号・事柄・口述可能なもの dicibile＞という三項構造を有し、一方で、＜事柄―口述可能なもの＞という認識関係は内的真理により保証されるが、他方で、＜口述可能なもの―記号＞という口述関係を保証するものは『教師論』で提示されない。第二に（第 2 章)、ストア学派の記号論は「言語的記号」と本来的な「推論的記号」とに分類され、一方、言語論は「指示するもの」と「指示されるもの」、すなわち、「音声」と「口述されうるもの」λεκτόν との対概念で構成され、更に、意味の担い手は「主張文」とされる。これに対して、アウグスティヌスは、『問答法』において意味の担い手を単語単位に移し、ストア学派の「推論的記号」における指示作用を言語に導入することで、彼独自の言語の記号理論を創設する。第三に（第 3 章)、『キリスト教の教え』における記号理論は＜記号・事柄・思考上の何か＞という三項構造を有し、受信型記号は指示関係＜記号→事柄＞に関連する記号理論から、発信型記号は口述関係＜思考→音声＞に関連する言語理論からそれぞれ説明され、口述関係＜内的言葉→音声＞が＜神の言葉→キリストの受肉＞という受肉理論に基礎付けられることが確認される。

以上より、『教師論』と『キリスト教の教え』とにおける記号理論の三項構造において、本質的相違は認められず、アウグスティヌスの記号理論における一貫性が確認された。他方、『教師論』で認識関係＜事柄―口述可能なもの＞が内的真理であるキリス

トによって保証されるのであったが、『キリスト教の教え』では口述関係＜思考―音声＞が受肉の神学によって初めて明示的に基礎付けられた。

第 II 部の「アウグスティヌスの言語理論」では、第一に（第 4 章）、『教師論』で主張されるところの内的真理を基準とする理性主義的方法は論理的命題を解決するものの、歴史性を含む主張的命題には対応できず、したがって、内的真理の直視が志向される直観的論証は包括的な魂の動きに支えられる言説的論証を最終的に否定し、この点で、「記号によっては何も学ばれない」ことが『教師論』の主題として確認される。また、『キリスト教の教え』における＜心に保持する言葉―音声＞関係が、＜神の言葉―受肉のキリスト＞関係との類似性に基づき、前者の関係的確実性が暗示され、「事柄は記号を通して学ばれる」ことが確認される。『三位一体論』でも、『キリスト教の教え』と同様に、音声と受肉のキリストとの類似性により、知識伝達を可能にするところの言説的論証が確保されている。第二に（第 5 章）、『シンプリキアヌスへ』第 1 巻第 2 問における回心構造は恩恵的な「相応しい呼びかけ」概念に基礎付けられ、神の「相応しい呼びかけ」は人間の主体性と意志の自由とを確保しつつ働くことが結論付けられる。『キリスト教の教え』では「人間を通して」学び合い伝授し合うことの重要性が主張され、それは『シンプリキアヌスへ』で確立された言語理論における彼独自の恩恵概念が前提とされる。加えて、『キリスト教の教え』における伝達可能な口述内容に、知覚内容や理解内容だけでなく、魂の動きとしての「愛」と「喜び」が含まれるようになるのも、『シンプリキアヌスへ』の影響と考えられる。

以上より、『シンプリキアヌスへ』では言葉による知識の伝達可能性が心理学的に「喜び」を契機に考えられ、更に、『キリスト教の教え』で心理学的に支えられた言説的論証は『三位一体論』でも堅持される。一方、『キリスト教の教え』で、口述関係＜内的言葉→音声＞が神学的に受肉のキリストから捉え直され、更に、『三位一体論』では、受肉の神学に基礎付けられた＜内的言葉→外的言葉＞の関係性と、心理学的な喜びに支えられた言葉による知識伝達とが明確に結び付けられるが、この結び付きは『キリスト教の教え』で暗示されたものである。したがって、『シンプリキアヌスへ』における恩恵的な「相応しい呼びかけ」概念の発見が、アウグスティヌスの言語理論的な発展に大きく貢献していることは確かで、『キリスト教の教え』における「事柄は記号を通して学ばれる」という言説的論証の主張にも『シンプリキアヌスへ』の影響を見て取ることができる。

第 III 部の「『キリスト教の教え』における聖書解釈学」では、第一に（第 6 章）、「神と隣人への愛」と「神と隣人への知」という解釈のクライテリアによって比喩的解釈の適用箇所が特定されるのであるが、解釈のクライテリアはキリスト教共同体が理想とする霊的なリアリティーそのものであり、共同体における聖書解釈の役割は魂の交流を促す倫理的な働きとして捉えられる。また、『キリスト教の教え』における聖書解釈学の中心点は転義的な多義記号の解釈にあるが、アウグスティヌスは単語レベ

ルの選別的な比喩的解釈を通して、比喩の「喜び」を契機に、「事柄」の理解における深まりと愛の実践へ人々を動かそうとする。第二に（第 7 章）、聖書解釈は生の展開の七段階における第三段階の「知識」scientia であると見なされてきたが、聖書の「理解」intellectus は字義的解釈による「知識」以上のものであり、最終段階にある終末的な「知恵」sapientia を垣間見せる比喩的解釈を通して、「神と隣人への愛」へ読者を動かす効力を有する。字義的解釈では「悲嘆」が、また、比喩的解釈では恩恵的要素を強く含む「喜び」が生の停滞を克服するための原動力と見なされる。

以上より、新プラトン主義に強く影響されるミラノサークル（アンブロシウスやシンプリキアヌスが属する）の一員からカルタゴの司祭へ変遷したところの、アウグスティヌスの Sitz im Leben の変化に伴って自覚的に考えられるようになった言葉の媒介的可能性は、教養教科的な理性的視点からでなく、人々の魂を動かし得る心理学的・神学的視点から共同体を基軸として主張されたのである。他方で、『キリスト教の教え』における比喩的解釈による「喜び」の効力は、『シンプリキアヌスへ』で発見された回心構造における「喜び」の心理学的効力に基礎付けられ、『キリスト教の教え』で初めて明言される音声の受肉理解は、聖書的証言に端的に依存する。したがって、『シンプリキアヌスへ』で見出された喜びの心理学的効力は、『キリスト教の教え』において、キリスト教共同体が理想とするところの「神と隣人への愛」へ促す推進力として、受肉理解に基礎付けられた聖書言語の解釈学に導入されたのである。

四　結論

初期著作群で追求された神探求の方法としての内的真理の直視による理解は、『キリスト教の教え』の聖書解釈学では終末的理想として捉え直され、代わって、愛と喜びに動機付けられた言説的言語を通した理解が実質的に主張される。『告白』で見出される、実存的人間の現実的状況を神の下に吐露し尽くすような祈りにも似たアウグスティヌスの口述表現は、『シンプリキアヌスへ』で発見された回心構造の恩恵概念と、『キリスト教の教え』で主張された愛と喜びによる聖書言語の比喩的解釈とに基礎付けられていると言える。アウグスティヌスは、言葉を内的深みの次元から汲み上げれば汲み上げるほど、神の恩恵としての喜びが言葉において読者に働き、それゆえ、話し手の意志が読者の喜びとなって伝達され、その結果、心動かされる読者は恩恵的に神の愛を理解するに至る、『シンプリキアヌスへ』に続く『キリスト教の教え』において、彼はこのような言葉の媒介的可能性を言葉において働く神の恩恵概念として見出したのである。